

私が歩んできた看護の道

日高 由美子

杏林大学医学部附属看護専門学校専任教員

好奇心からの出発

私が助産婦になりたいと思ったのは、小学生の頃でした。

同級生のSちゃんの家は、産婦人科医院を営っていました。学校帰りSちゃんの家遊びに行くと、私は病院の中から聞こえてくる赤ちゃんの泣き声や、そこで働く白衣姿の助産婦さんたちが気になってしかたがありませんでした。ドアの向こうは、いつも私の好奇心を揺り動かす所でした。そして、怒られることを知りつつもドアを開け、医院で働く看護婦や助産婦さんの仕事をこっそりと陰から眺めていたものでした。そして、その時すでに私は、「赤ちゃんを産ませてあげる助産婦さんになりたい」と考えるようになっていました。

18年間を振り返ってみて

助産婦学校を卒業して今年で19年目を迎えます。卒業後は、4年間ほどNICUに所属し、未熟児やハイリスク・ベビーの看護を経験しました。生まれて初めて出生体重500g以下の新生児を受け持った時の緊張感は、今でも忘れられません。

その後は、大学病院の周産期センター母性部門の助産婦として勤務しました。しかし、私は緊急時、即対応できる助産婦になりたいという思いが強く、集中治療部(ICU)での看護を学ぶ決心をしました。その機会が得られ、2年間ICUで働くことができました。ICUでは主に循環器・呼吸器・消化器・脳神経系疾患の術後患者の看護を学

ばせてもらいました。灯油や薬物による自殺を図った患者さんなどの様々な看護も体験しました。元気にICUを退室される患者さんを見送る時は、心から回復の喜びを感じます。しかし一方、治療や看護の甲斐なくICUで「死」を迎えられた時の最後のケア、つまり「死後の処置」を行なうときは、本当に辛いものでした。

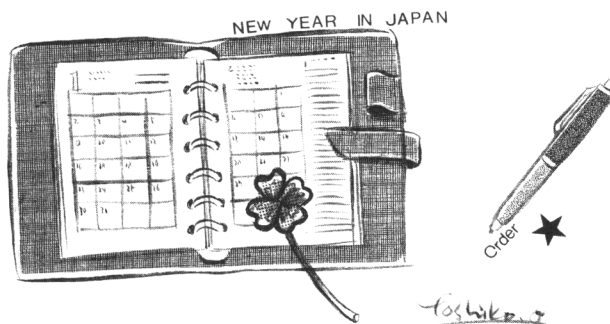
私は、臨床でたくさんの患者さんや妊産褥婦さんに会い、多くの学びを得ました。その一つ一つの貴重な体験は、すべて私の大切な財産となっています。

その後、厚生省看護研修研究センター助産婦養成所教員養成課程で学ぶ機会を得、卒業とともに私の教員生活が始まりました。

緊張と共にスタートした教員生活

看護専門学校の専任教員としての生活がスタートしたのは、4年前になります。いよいよ授業も始まり、母性看護学だけでなく、基礎看護学も数時間ですが私が担当することになりました。看護学生時代の記憶を思い起こしながら、更に、十数年ぶりに開いた看護技術の教科書や参考書を片手に、教えることの難しさをひしひしと感じながらも、新鮮な気持ちで取り組むことができたように思います。しかし、初めての講義や演習では、果たして学生が理解してくれるのだろうか、不安な思いと極度の緊張状態のまま教壇に立ったことも忘れられません。

今も授業の準備、臨地実習指導、学内での様々な行事など、専任教員の仕事は想像以上に忙しく



大変です。しかし、大変な中にも学生が少しずつ成長していく姿を見ると、喜びを感じることも多くあります。

そして昨年の4月には、私が初めて分娩介助をした子どもと同年齢の新入生を、たくさん迎えました。助産婦学生時代に取り上げた赤ちゃんの成長をみているようで、とても感激し、同時に時間の流れの速さにただただ驚くばかりでした。

看護教員として思うこと

母性の病棟実習が始まると、ほとんどの学生が「先生、お産は本当に見られますか、いつ見られるんですか」と聞いてきます。もちろん学生の真剣な眼差しは、興味本位で出た言葉ではないことが確信できます。出産に立ち会えなくても、母性実習で学べることはたくさんあるに違いありません。しかし、私は学生に一度だけでも出産に立ち会う機会を与えてあげたいと思っています。それは、人がこの世に誕生する瞬間は言葉では言い尽くせない感動や喜びがあると思うからです。産婦さんや家族とともに、その感動や喜びを、一人でも多くの看護学生に味わってほしいと思っています。また、陣痛の痛みや辛さの中で、一生懸命子どもを産み出そうとしている産婦さんの姿を見たり、実際傍に寄り添い手を握ってあげたり、マッサージを施すことは、学生にとっては貴重な経験となると思うのです。

分娩室実習の学生の態度は、本当に真剣です。最初は陣痛で苦しんでいる産婦さんを目の前にすると、自分に何ができるのか、どう接してよいの

か戸惑いと緊張で立ちすくむことがあります。しかし、助産婦さんの指導を受けながら学生も一生懸命、自分にできることを探そうとしています。

もちろんすべての学生が出産立ち会いを肯定的にとらえられるとは限りません。しかし、大半の学生は産婦さんに関わり、そして出産に立ち会った後、必ず自分の母親への感謝の気持ちを言葉にします。そしてその言葉を直接、自分の母親へ伝える学生も多くいます。このような体験を通して、さらに命の大切さを認識したり、人にやさしい気持ちで接することができるようになり、感謝するという気持ちも今まで以上に養われていくと信じています。

また私には、母性看護学を担当している教員として、一人の助産婦としての願いがあります。母性看護に興味を持ち、一人でも多くの学生が助産婦を希望してくれるようになって欲しいと思っています。学生から、「母性実習を経験するまでは母性に興味がなかったけれど、助産婦さんってカッコよくて、すばらしいですね。私も助産婦になりたいです」という言葉を聞いたとき、私は心の中で「ヤッター」と叫んでしまいます。

今どきの学生と関わることは、正直、エネルギーが必要です。しかし、学生との関わりの中から私自身、たくさんのことを学ばせてもらっているということを、今は強く感じています。

次回は、私の先輩であり、現在は国立がんセンターICUの婦長として頑張っておられる古厩先輩にバトンを渡します。

(ひだか・ゆみこ)